

昨日一月十一日は「鏡開き」の日でした。お正月の間お供えした大小二つの丸いお餅を下げ、召し上がった方も多かったのではないのでしょうか。この丸餅はその年の歳神様をお迎えして、そこに宿って頂く<sup>よ</sup>依り代<sup>しろ</sup>だと考えられています。

多くの神社のご神体<sup>しんたい</sup>としても鏡が用いられているところから、それになぞらえて丸餅が用意され、鏡餅となったと言われています。一方、歳神様へのお供えとして、<sup>だいだい</sup>橙 や<sup>うらじろ</sup>裏白、ゆずり葉などの縁起物を添えた飾り餅が鏡餅となった、という説もあるようです。いずれにせよ丸い形は角が無く、円満な姿の象徴として、また私達の心や魂の象徴として、年の初めに幸先の良いスタートが切れますようにという願いが込められているのは確かでしょう。

鏡の働きについては道元禅師は『正法眼蔵』<sup>こきょう</sup>「古鏡の巻」で取り上げています。題名の古鏡とは古い鏡と書きますが、これは古くなった鏡ではありません。絶え間なく様々な姿を映し出す現役の鏡です。ではなぜ古いという字を用いたのかと言うと、恐らくそこに仏様や歴代のお祖師様方を映し込んでいるからだと考えられます。その方々が実践し、示された仏法や仏道がその背景にあるからです。そしてその鏡を私達が具えているのだとお示しになっているのです。

そうだとすると、私達が具えている鏡には絶え間なく様々な姿が映し出されていることになります。美しいものも、そうでないものも、楽しいことも、辛いことも。では実際その鏡に映し出されたものはありのままの姿でしょうか。自分にとって都合の良いことは好意的に映し出し、自分にとって都合の悪いことは否定的に映し出して、実像を歪めてはいないでしょうか。

## 『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

---

鏡開きの日にはお供えしていた丸餅を割ったり、砕いたりしてから頂いて、自分の体の一部とします。新年早々割るとか、砕くなどと言うのは縁起が悪いので、開くと言います。ところが道元禅師は、鏡に相手のありのままの姿が映し出された瞬間、その鏡は木端微塵こっばみじんになるという逸話を示されています。それは仏性や仏法の働きが私という一個人の枠を超え出た瞬間なのでしょう。

鏡開きにおいて一見縁起が悪いように見える鏡餅が割られ、砕かれた姿にも私達はむしろ目を向けてみたいと思います。去年の自分の姿を打ち砕いてその枠組みから抜け出し、新しい自分となって一年をスタートする。鏡餅に宿った新しい力が必ずやそれを後押ししてくれるはずです。

— 終 —